

### 3 イチジクヒトリモドキの被害と生態

はじめに

イチジクヒトリモドキは1962年に静岡県、1980年代には九州各県で採集されるなど初発生ではない。熱帯性の害虫であることから、これまでの発生は偶然飛来した偶発的な発生とされていた。しかし、愛媛県では1999年秋に成虫を発見した翌年の2000年春に成虫と幼虫が引き続いて発生したことから越冬が確認された。本県でも2005年の初確認以降も発生していることから定着したものと考えられる。

#### (1) 形態、習性

成虫は開張50～70 mmの比較的大型の蛾で、ぜんし前翅は淡褐色で基部付近は橙色に染まり黄白色の斑紋をもつ、特徴のある蛾である。卵は淡黄色で径約0.8 mmのまんじゅう型をしており葉裏に30～60個の卵塊として産み付けられる。若～中齢幼虫は背面が全体に白っぽく、頭部は黒色、体側面は橙色である。終齢幼虫は体長約40 mmで体全体に刺毛をもち頭部はつやのある黒色、背面の白色部や体側の橙色部分は黒化し、このため橙黄色の刺毛基部がよく目立つ。背面や体側の一部には白い帯状の斑紋が残る。

若～中齢幼虫の間は集合性が強く、主として葉裏に群生して食害する。老熟すると樹を降りて株もと付近の土につちまゆ潜り土繭ようかを作って蛹化する。

#### (2) 発生回数、被害

愛媛県での飼育試験等から年4回の発生が推測され、本県でもほぼ同じ発生回数があるものと思われる。越冬世代成虫の出現時期を5月とすると第一世代が5月下旬～7月上旬、第二世代が7月

月上旬から8月上旬、第三世代が8月上旬～9月中旬、第四世代が9月中旬以降に発生してくるものと推測される。イチジクの生育から第二、第三世代の被害を防ぐ必要がある。食害による被害は大きく、多発すると葉を食い尽くすため果実肥大に影響する。葉がなくなると果実にまで食害が及ぶ。

#### (3) 防除対策

幼虫は若い葉を好み葉裏から表皮を残して食害する。このため、ハスモンヨトウによるダイズの白変葉のようになり、発生を見つけやすいので、幼虫発生時期(7月上旬ごろ)になると園を頻繁に見て回り、群生状態の葉を取り除くのが最も確実である。

登録剤はないため、本種を対象とした薬剤散布はできない。しかし、薬剤感受性は高く、イチジクに登録のある大半の殺虫剤で効果が高い。このため、アザミウマ類、クワカミキリなど既存害虫の防除時期である6月下旬～7月上旬の防除を実施することで被害につながる発生は防ぐことができる。

長田 靖之 (農業技セ・病害虫防除部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-1222)



図 終齢幼虫 (香川県病害虫防除所提供)